

大阪教育大学

岸本幸臣

○神戸山手女子短期大学 中西真弓

目的 本編では前編の考察を受けて、私室の中での行為と私室に関わる意識や評価を取りあげ、その特性と問題点を考察する。

方法 前編に同じ。

考察 (1)私室の評価 私室は全体的に満足度が高い。「広さ(57%)」「プライバシー(63%)」「様式(68%)」「起居(55%)」「総合(65%)」と約60%前後の満足度がみられる。特に大いに満足が多いのは、「様式(32%)」「プライバシー(27%)」「起居(21%)」である、私室の評価は物理的条件よりも、住み方の方に高くなっている。(2)私室内の行為 私室内で行われている行為としては、「睡眠(96%)」「着衣(85%)」「勉強(87%)」「レコード鑑賞(83%)」「休息(76%)」などが多い。逆に家族の交流に関わる行為の私室内持ち込み率は少なく、公私の生活に秩序化がみられる。私室には、「母親(43%)」「姉妹(33%)」の出入りが頻繁であり、しかも、かなり自由な出入りとなっており、開放的な住み方の成立がみられる。睡眠時間を除く私室内滞在時間は2.6時間と比較的長くなっている。(3)志向性 私室はほぼ全員(99%)が必要だと考えており、その理由も「一人で静かに過ごせる(36%)」や「家族の干渉なしに過ごせる(48%)」が多く、個人生活の場としての機能が評価されている、また、私室の必要面積としては「8~9.9畳(57%)」を、様式では「洋室(99%)」を望むものが多い。(4)まとめ 今日の私室の実態は、個人生活の場として機能しているが、欧米のそれとは違い空間的には、かになり開放的な私的生活の場として成立している点が特徴的である。また、この特性は住まいの平面構成における公私室論の今日的再考に一つの示唆を与えていると思われる。